



Title	「ひとつ涙」考：『源氏物語』を中心に
Author(s)	保坂, 智
Citation	国語国文研究, 156, 14-28
Issue Date	2021-02-08
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/89214">http://hdl.handle.net/2115/89214</a>
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_156_14-28.pdf



[Instructions for use](#)

# 「ひとつつ涙」考

——『源氏物語』を中心に——

保 坂 智

## 一 はじめに

光源氏が須磨に謫居し一年近く経ったころ、宰相となった頭中将がにわかに訪れる。

いとつれづれなるに、大殿の三位中将は、今は宰相になりて、人柄のいとよければ、時世のおほえ重くてもものしたまへど、世の中あはれにあぢきなく、ものををりごとくに恋しくおほえたまへば、事の聞こえありて罪に当たるともいかがはせむと思しなして、にはかに参でたまふ。うち見るより、めづらしううれしきにも、ひとつつ涙ぞこぼれける。(須磨・②二二三頁)<sup>(注1)</sup>

罪をものともせず来訪した宰相中将は、『無名草子』において「須磨の御旅住みのほど尋ねまゐりたまへりし心深さは、世々を経とも

忘るべくやは<sup>(注2)</sup>と絶賛され、以来二人の友情を語る屈指の場面とされてきた。

ここに物語中一度だけ「ひとつつ涙」が使われる。他の文献も含め初出であるため、語義はこの場面の用法を中心に導きだされ、最近では「悲喜こもごもの一つ涙」とする理解が通説となっている。その解釈は「うれしきもうきも心はひとつにてわかれぬ物は涙なりけり」(『後撰集』卷十六・雑二・一一八八)を引歌とする。(注3)

たしかに、この歌の大意を象徴的に示したことばのようにも見えるが、肝心の「ひとつつ涙」という語は含まれておらず、疑問が残る。ところが、このことばは以後の物語や和歌にも現れ、『後撰集』および『源氏物語』を踏まえた表現ととらえられている。それゆえ、この語をどのように解するかは『源氏物語』の解釈の問題であるとともに、歌ことばとしての「ひとつつ涙」の成立と享受の問題にもかかわってくる。

本稿は、『源氏物語』の解釈を検討し、語義理解の変遷を見定める

とともに、後述する各物語の読解についても修正をうながすものである。

## 二 問題の所在

該当箇所 の 諸注 の 解釈 を 新し い もの から 分類 整理 し て おく。

【A】うれしさと悲しさが一つになって出る涙

○君を一目見るなり、珍しくも嬉しくも、悲喜こもごもの一つ涙がこぼれ出るのです。  
(『正訳』訳)

○悲喜こもごもの一つ涙がこぼれた意。  
(『注釈』注)

○中将は君を一目見るなり、珍しくうれしく、嬉しさと悲しさが一つの涙になってこぼれた。  
(『鑑賞と基礎知識』訳)

○源氏の君のお顔を一目見るや、久方ぶりの懐かしさ、また会えたりうれしさに、悲喜を分たぬ一つ涙がこぼれるのであった。

(『新全集』訳・『完訳』訳)  
○うれしさと悲しさと、二つの感情が同じ一つの涙になって流れるのだった。  
(『集成』注)

○君を一目見るやいなや、しばらくぶりのなつかしさ、また会えたりうれしさに、悲喜を分かたぬ一つ涙がこぼれるのであった。  
(『全集』訳)

『正訳』は引歌を指摘しないが、それを前提とした訳となっており、かえって「悲喜こもごもの一つ涙」という理解が自明であることを

示す。ただし、同じ引歌を認める解釈であつても、別の解釈もある。

【B】うれしいのに、悲しい時に流すのと同じ涙

○(源氏の逆境を悲しんだのと) 同じ涙が(うれし涙として)三位中将の目からこぼれたことだ。  
(新版『岩波文庫』注)

○(源氏の逆境を悲しんだのと) 同じ涙が(うれし涙として)こぼれた。  
(『新大系』注)

○源氏のお顔を見たたん、初めて見るような気がして嬉しいにつけても、あの古歌ではないが、悲しい時と同じように涙がこぼれたのだった。  
(『学術文庫』)

○一寸お顔をお合はせになるより、暫らくぶりの御面会の珍らしさ嬉しさにつけて、いつぞやの悲しい別かれに、こぼしたのと同じ涙がこぼれるとは、「(略)」といふ後撰の名歌を思はせて皮肉である。  
(『完譯』訳)

○寂しく恋しき時と(ひとつ涙ぞ)  
(『大系』傍注)

○悲しい時に流れる其涙がこの嬉しい時にも流れた。  
(『對校』注)

『学術文庫』『對校』は具体的に「悲しい時」を想定しないものの、悲しさと嬉しさが一つになった涙とせず、かつて悲しみの涙を流したけれども今回はうれし涙が、とする。しかし実は、まったく異なる次のような解釈もあった。

【C】二人がともに流す同じ涙

○顔をあわせるやいなや、珍しくうれしくて、いっしょに涙が流れたのだった。  
〔評釈〕(註)

○宰相中将も源氏も同様涙がこぼれた。  
〔全書〕注

○源氏も宰相も共に涙がこぼれた。  
〔新解〕注

引歌を認めず、「ひとつ涙」を「二人がともに流す涙」とするもので、この解釈にも一理あることを認め、詳しく考察したのが『全釈』である。

○河海抄・細流抄・弄花抄などは、後撰(略)保坂を引歌として挙げる。歌の心は一致しているが、ことばの類似がや、少ないようにも思われるから、これと決めるのには躊躇される。金子氏・池田氏は「宰相中将も源氏も同じように涙がこぼれた。」とされる。引歌を考えないでよいのなら、この解が穩当であろう。(なお「こぼれ給ひける」とないのは、主語が「涙」であるから、許されるであろう。)又、後撰の歌によって訳す場合も、「うれしいのに、悲しい時(さびしく恋しい時)と同じ涙が流れた」の意とする説(宮田氏・吉沢氏・佐成氏・五十嵐氏・山岸氏)と、「現在うれしさと悲しさが一緒になった涙が流れる」と取る説(岷江入楚)とがある。今しばらく後者に従っておく。／＼対面するなり、珍らしくうれしいのにつけても、悲喜こもぐの涙がこぼれたのでした。  
〔全釈〕注／訳

結局は引歌を認めた現代語訳をつけているが、指摘のとおり、『後

撰集』歌と『源氏物語』とでは語句の一致は少なく、『後撰集』歌には眼目となる「ひとつ涙」がない。にもかかわらず、なぜこれほど多くの注釈書が引歌とするのか。古注釈の影響と推察されるが、古注釈がどのような意識から挙げたのかは不明であり、厳密な意味での「引歌」としてではなく、いわゆる「参考歌」として挙げただけかもしれない。そこで単に歌を指摘する以外の古注釈を詳細に調べると、以下のような揺れに気づく。

○師 源にわかれぬるほどはうきなり、今かく逢ひ見奉る事はうれしき也。  
〔湖月抄〕

○私 あはれなるさまをみ奉るはうき也。又めつらしく今見奉るはうれしき也。  
〔岷江入楚〕

○私 喜憂一と也。三位中将に逢給と憂と一に涙かこほる、と也。朋友深切之志可感之。  
〔孟津抄〕

『岷江入楚』は【A】説、『湖月抄』は【B】説、引歌を認めた上でも「うき」は光源氏と別れた時の心境か、現在の窮状を見ての思いか、古くから対立していたことがわかる。『孟津抄』の「喜憂一」という注は「細流抄」にもあるのだが、次の「三位中将に逢給」は注目に値する。さらに、歌を指摘しない次のようなものもある。

○前に大式か参りたるは、君臣の礼、こゝに中将の参り給ふは朋友の信也。源氏は御心さしのありかたしとて、涙をなかし、なにくれともてなし、詩をつくり歌をよみなくさめ申給ふ也。

○おはしつきてもろともになみたにしつみて、  
（『提要』）  
（『源氏釈』）

『孟津抄』を含めたこれらの注が示唆するのは、涙を流す主体についてである。『源氏釈』は【C】説と同じで二人が主体、『提要』『孟津抄』は光源氏が主体となっている。

引歌を認めるか否か。泣く主体は光源氏が宰相中将か、あるいは両者か。問題は検証されぬままだった。

### 三 見る主体、泣く主体

はじめに、涙を流す主体から検討しておく。『孟津抄』『提要』は一連の主体を光源氏と解した。あまり顧みられないこの解釈にも、実はそれなりの根拠がある。宰相中将の来訪直前には、光源氏が涙を流す様子が次のように描かれていたのだ。

須磨には、年かへりて日長くつれづれなるに、植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて、空のけしきうららかなるに、よろづのこと思し出でられて、うち泣きたまふをり多かり。二月二十日あまり、去にし年、京を別れし時、心苦しかりし人々の御ありさまなどいと恋しく、南殿の桜は盛りになりぬらん、一年の花の宴に、院の御気色、内裏の上のいとよらになまめいて、わが作れる句を誦じたまひしも、思ひ出できこえたまふ。

いつとなく大宮人の恋しきに桜かざしし今日も来にけり

この後に、先に引用した「いとつれづれなるに」と続くのである。二つの「つれづれなる」はどちらも光源氏の様子であるため「うち見るより」の主体も源氏と考え、往時を思い出し泣き暮らしていたところに、宰相中将が来てくれたうれしさから、憂いと喜びの涙がこぼれたと解したのであり、この理解であれば『後撰集』歌の詞書とも通じそうである。

しかし、やはり「三位中将は」とあり、その題目提示の「は」は文をまたいで機能すること、続く「住まひ給へるさま、言はむ方なく唐めいたり」の後には宰相中将の目を通して、源氏の住まいが描写されることを考え合わせると、この「うち見る」主体だけ光源氏と考えるよりも、やはり宰相中将とすべきと思われる。しかし、その場合「つれづれなるに」の落ち着きの悪さは残り、しばらく光源氏に言及がない。そのことが気になったからか、賀茂真淵は「うち見るより」を、「源も宰相も相見たるをかねたりとも見ゆ」と光源氏と宰相が互いに、とする見方を示した。ただし、「かたみに」あるいは「あひ見る」ではないため苦しいところであるが、「相見たるをかねたり」程度の含みは認めることはできる。結局、見る主体は宰相中将と考えるほかないのだが、当然その際には光源氏も宰相中将を見ることになり、涙をこぼす主体としては宰相中将と光源氏の二人と考える余地は残る。

（須磨・②二二頁）

#### 四 和歌との関わりから

次に、引歌の問題へと進みたい。まずは『後撰集』歌を確認しておく。

もの思ひ侍りけるころ、やむごとなきたかき所より

とはせたまへりければ よみ人しらす

・うれしきもうきも心はひとつにてわかれぬ物は涙なりけり

(『後撰集』巻十六・雑二・一一八八)

詞書によれば、物思いのころ、貴人から慰めのことばをかけたも  
らったことへの感謝の歌である。歌意はうれしいこともつらいこと  
もそれを感じる心はひとつであって、それを区別できなくさせるの  
はどちらの時も同じく流れる涙であったよとなる。一見すると、う  
れし涙だけなのか、悲しみの涙とうれし涙とが混じっているのかは  
定かではないが、詞書をふまえれば、おことばを頂戴した感動から  
涙を流しているのだが、傍目にはそれまでと区別がつかないという  
ことになる。本文は「ひとつ涙」ではなく「心はひとつにて」とあ  
り、歌の「分れぬものは涙」と須磨巻の「ひとつ涙」の間にはやは  
り表現上の懸隔があると言わざるを得ない。『後撰集』歌はあくま  
で涙は悲喜の区別がつかないとするだけであり、この歌を須磨巻の  
解釈に敷衍し、悲喜が入り交じった一つの涙とは解釈するには、そ  
うした意味での「ひとつ涙」の成立をこの場面に見なければならな

いだらう。

はたして、そのような語句がここに誕生したのだろうか。『国歌  
大観』によれば、「ひとつ涙」を含む歌は早くて鎌倉時代に二例、全  
用例で一一例しか見いだせない。もっとも古い用例は、飛鳥井雅有  
(1241~1301)の次の二首である。

秋の歌の中に

・むしのこゑしかの鳴くねも秋はただひとつ涙にあはれとぞき

く (『隣女集』巻四・二〇六〇)

人のもとに申しつかはし侍りし

・よのうさも人のつらさも神無月ひとつ涙にふる時雨かな

(『隣女集』巻四・二一九四)

一首目は「むしのこゑしかの鳴くね」のどちらも秋は「ひとつ涙  
に」しみじみと聞くという意、二首目は「よのうさと人のつらさ」  
どちらによつても「ひとつ涙」が流れるとする歌である。「神無月」  
に「うさ」「つらさ」から泣くのと、悲喜こもごもの涙とは考え  
られない。為家に『古今集』や『源氏物語』を学んだ雅有だが、内  
容上の連関を見られない。次に古いのが正徹(1381~1459)の歌で  
ある。

秋夕

・袖はなひとつ涙ぞあはれともうしとも思ふ秋のゆふぐれ

(『草根集』三六五八)

遠恋

・わすれずはひとつ涙や思ひやるほどは雲井の月に落つらん

〔『草根集』六九一〇〕

懐旧

・うかりしもなさけありしもふることをしのぶやひとつ涙なる

〔『草根集』一〇二六八〕

らん

一首目は、感じ入るときもつらいときも、どうして「ひとつ涙」なのかという意、三首目も相反する「うかりし」ことも「なさけありし」ことも含め過去を偲ぶせいか、「ひとつ涙」がこぼれるようだとする。この二つの「ひとつ涙」は悲喜どちらによつても同じようにでる涙ととらえられる。悲喜こもこもの涙とも解釈できそうであるが、『源氏物語』に通暁する正徹であるなら、もつとはつきりと須磨巻とつながる歌い方をするのではなからうか。たとえば、二首目は次の歌を踏まえた「一對にいふべき歌」（『正徹物語』七〇段）と推察される。

むかし、男、あづまへゆきけるに、友だちどもに、道よりいひおこせる。

・忘るなよほとは雲居になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまで

〔『伊勢物語』一二段／『拾遺集』卷八・雑上・四七〇〕

この「忘るなよ」を受けて詠まれたことはわかるのだが、正徹歌は「月に落つらん」などの細部は解釈が難しい。大意は、忘れてい

ないならば、思いをはせる距離は雲井ほど遠くなくても袖に映った月に「ひとつ涙」が落ちているだろうかというところだろう。この「ひとつ涙」は自分と同じ涙とも昔と同じ涙とも解釈できるが、悲喜こもこもの涙と理解する余地はない。一首目は季節が春と秋で異なるし、三首目も「懐旧」であり、再会のうれしさと関わりがないことを踏まえると、正徹でさえ源氏に由来する語としての「ひとつ涙」の意識は薄いのである。正徹以降の例からも「ひとつ涙」が悲喜こもこもの一つ涙として成立していたとは判断し難い。

以上、「後撰集」歌を須磨巻「ひとつ涙」の解釈に当てはめるのは語句や内容に隔たりがあるため無理であること、また『源氏物語』を読み込んだ中世歌人の歌に「ひとつ涙」を悲喜こもこもの涙と積極的に解釈可能な用例は見えず、単に同じ涙と訳せることを確認した。

## 五 引歌にあらず

「ひとつ涙」は同じ涙と訳せるとしても、「同じ」は何と何が同じなのか。須磨巻の解釈に当てはめると【B】説はつらさとうれしさであり、【C】説は宰相中将と光源氏ということになる。では次に【B】説の可能性を検討したい。前節でみたように、歌では「うれし」「うれし」とともに詠まれる場合が多かったが、類義語「同じ涙」がより多く使われる傾向にある。

・うすくこくころものいろはかはれどもおなじなみだのかかる

そでかな (『後拾遺集』卷十・哀傷・五九〇・平教成)

うきせにもうれしきせにもさきにたつ涙はおなじ涙なりけり

(『千載集』卷十七・雑歌中・一一一七・藤原顕方)

うれしきもつらきもおなじなみだにてあふ夜もそでは猶ぞか  
わかぬ

(『新勅撰集』卷十三・恋歌三・七八七・皇嘉門院別当)

うらむるもこふる心のほかならでおなじ涙ぞせくかたもなき

(『続千載集』卷十五・恋歌五・一六一一・為家)

これらの用例からすると、うれしい時もつらい時も同じ涙が流れる意なら、「同じ涙」を用いてもよいと思われるが、『源氏物語』中に「同じ涙」はなく、他の散文作品でも『浜松中納言物語』に一例だけである。<sup>(注13)</sup>しかし、いずれにせよ「同じ涙」「ひとつ涙」とも散文の用例は歌より少ない。なぜかといえ、次のような表現がでるからだろう。

例のことなれば、しるしあらしとくづほれてながめ臥した  
まへるに、胸うちさわぎていみじくうれしきにも涙落ちぬ。

(紅葉賀・①三三〇～三三二頁)

君は、塗籠の戸の細目に開きたるを、やを押し開けて、御屏風のはさまに伝ひ入りたまひぬ。めづらしくうれしきにも、涙落ちて見たてまつりたまふ。  
(賢木・②一〇九頁)

小君は姉の浮舟が亡せたまひにけりと聞き、いと悲しと思ひわたるに、かくのたまへば、うれしきにも涙の落つるを、恥

づかしと思ひて、 (夢浮橋・⑥三八四頁)

吉野姫君) わりなくはづかしけれど、すこし頭もたげて、顔をもて隠し給へるに、むげに言ふかひなくのみ見え給へるに、(中納言は) めづらしくうれしきにも、まづ涙出でて、

(『浜松中納言物語』卷五・四二九～四三〇頁)

初めの二例は、ともに光源氏が藤壺とのやりとりで流した涙である。一例目は期待していなかった藤壺の返書を得た感動を、二例目は昼の光の下で藤壺を見た感動を表す。『浜松中納言物語』の用例も、吉野姫君を間近で見た中納言の喜びを表す。夢浮橋巻の例は、死んだと思っていた姉浮舟の生存を小君が薫から知らされる場面である。うれしいときにも涙が溢れ出るさまをいうのであれば、たしかにこれらの表現でも十分伝えうる。賢木巻は須磨巻とほぼ同じ表現であるにもかかわらず、引歌を指摘する注釈書はない。

それでは逆に、『後撰集』歌を引歌とする表現は他にあるのか。『源氏物語引歌索引』<sup>(注14)</sup>には、葵巻・藤裏葉巻・柏木巻の三例が指摘されている。以下に注釈書とともに挙げる。

大将殿は、悲しきことに事を添へて、世の中をいとうききもの  
思ししみぬれば、ただならぬ御あたりのとぶらひどもも心憂し  
とのみぞなべて思さる。院に思し嘆きとぶらひきこえさせたまふさま、かへりて面だたしげなるを、うれしき瀬もまじりて、  
大臣は御涙の暇なし。

(湖)〔余〕〔事〕 (葵・②四六～四七頁)



・いとうつくしげに雛のやうなる御ありさまを、夢の心地して見  
たてまつるにも、涙のみとどまらぬは、ひとつものとぞ見えざ  
りける。年ごろよろづに嘆き沈み、さまざまうき身と思ひ屈し  
つる命も延べまほしう、はればれしきにつけて、

(藤裏葉・③四五―四五二頁)

〔紫〕〔異〕〔河〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔入〕  
〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

・(落葉宮の母御息所)「……いまはとてこれかれにつけおきたま  
ひける御遺言のあはれなるになむ、うきにもうれしき瀬はまじ  
りはべりける」とて、いといたう泣いたまふけはひなり。

(柏木・④三三三頁)

〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔引〕〔事〕〔評〕〔集〕

葵卷・柏木卷ともに弔間の場面である。「うき」状態で悲しみに暮  
れながらも、「うれしき瀬もまじり」涙を流す。「うれしき瀬」を含  
む歌は先にみた『千載集』頭方歌以外にも、以下のような例がある。

・心みに猶おりたたむなみだがはうれしきせにも流れあふやと

(『後撰集』卷十・恋二・六一二・橘敏仲)

・水まさる心地のみしてわがためにうれしきせをば見せじとやす  
る (『後撰集』卷十三・恋五・九九三・をとこ)

・いのりつつたのみぞわたるはつせ川うれしきせにもながれあふ  
やと (『古今六帖』三・かは・一五七〇)

「まじり」を含む歌があれば良いのだが、見つからない。うれしき  
とつらさがまじりあつた涙、前節で見た悲喜こもごもの涙として葵  
卷と柏木卷の例がある。しかしながら、そのような二つの感情が一  
緒になった涙を「ひとつ涙」と表現してはいないのである。ここで  
も引歌とされる『後撰集』歌には、あくまで「心はひとつ」とある  
だけなのだ。さらに、「瀬」はない。であるなら、葵卷・柏木卷の用  
例に『後撰集』歌を引歌として認める必要があるのだろうか。むろ  
ん「引歌」の定義にもよるが、歌を経由せずとも十分解釈できる。  
悲しき折に高貴の人から慰問を受けてである点は詞書に合うもので  
はあるが、うれしいときにもつらいときにも涙はであるという発想自  
体は、和歌として珍しいものではない。<sup>(注1)</sup>

・世にはねをわびてなくだにある物をうれしきにさへおつらなみ  
だか (『躬恒集』一九三)

つくしにて、をんなにあひて、あか月がたにいひやる

・なにごとのけさはうれしき我なれやなみだはわかぬものにざり  
ける (『重之集』五八)

・うれしきもつらきもことにわかれぬは人にしたがふ心なりけり  
(『後撰集』卷十・釈教歌・六二五・選子内親王)

こうした発想による歌の一つに『後撰集』歌がある。その発想は  
表現の前提になっているが、「うれしき瀬」という語がない歌をあえ  
て引歌として『源氏物語』の解釈に援用する必要はないのではな  
いか。ほぼ同じ表現であるにもかかわらず、葵卷と柏木卷とで引歌を

指摘する注釈書に出入りがあることがそのことを如実に示している。

一方で、藤裏葉巻の用例は注意が必要だろう。娘の入内に際しての感慨を、うれしい涙と悲しい涙が同じものだとは思われないと、明石の君がうれし涙を流す場面である。先の二つとは異なり、純粹なうれし涙を流し、今までのつらく悲しい涙と対比している。これのみ「ひとつもの」とあることから、まさに『後撰集』歌を介した解釈が求められる。『岷江入楚』私説が「うれしきにもうきにも涙のおつる所は同じもの也」「されともうれしきとうきとの心はひとつ物にはあらずと引かへたる歎」と指摘するように、「心」は「ひとつ」でないとして、それゆえうれし涙は「とどまらぬ」という流れに位置づけなければならない。

翻つて、須磨巻はこのように『後撰集』歌に基づく解釈を要請しているだろうか。これまでの検討をまとめると、『後撰集』歌の「涙は悲喜を分かたぬ」という発想自体は他にも多く見られるものであった。また、それを現代の諸注釈書が引歌表現であると指摘する『源氏物語』の用例はそれぞれ解釈に取りこむべき水準が異なっているであつて、同様に扱えるものではなかつた。古注釈が挙げた歌をいわゆる「引歌」の射程と同列に扱うべきではなかつたのである。そもそも、『後撰集』歌には「ひとつ涙」という語はなく、悲喜の入り混じつた涙という解釈の余地はなかつたのだ。

それでも「ひとつ涙」に定着された叙情性を見ようとして、諸注釈書は物語に現れない頭中将の「うき」を一年前、あるいは現在に想定する。または、主体を光源氏とし、直前にあつた過去を思い出

し悲しみに暮れる姿を「うき」とし、『後撰集』歌とのつながりを見いだす。いずれも歌に合わせて解釈を試みているかのようである。『後撰集』歌はうれしいこともつらいことも感じる「心はひとつ」とした上で、涙はどちらの感情から出るのか区別できないといつていただけなのだ。無理をおしてあてはめる必要はなかつたのである。

## 六 「ひとつ十名詞」

引歌を想定しないとすると、残るは【C】の解釈である。この場合、特別な意をもつ歌ことばとしてではなく、「ひとつ十名詞」の複合ととらえることになる。「ひとつ」には単一であることをしめす「ひとつ子」「ひとつ所」といった用法もあるが、同一のものを示す用法もある。ここで改めて、後者の「ひとつ」を検討したい。

題しらず

よみ人しらず

・みどりなるひとつ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける  
（『古今集』巻四・秋歌上・二四五）

・なくむしのひとつこゑにもきこえぬはこころこころにものやかなしき

（『詞花集』巻三・秋・二二〇・和泉式部／＼和泉式部集』一三六・八六一）

「ひとつ草」は同種類の草の意で、「春・ひとつ・草」と「秋・いろいろ・花」の対比から用いられる。「一つ声」は同じ声であり、「ひ

とつ」と「心々」の対比の興を示す。「同じ」と「ひとつ」は意味が似ていても当然差異があり、他の語との対比関係等により選択される。<sup>(注15)</sup> 検証してきた『後撰集』歌も「わかれ」との縁で用いられていたと思われる。<sup>(注17)</sup>

また、小山登久「ひとつ」を語基に持つ複合語をめぐって<sup>(注18)</sup>は、同一の作品内において「ひとつ」の直後に言い換えとして「同じ」が来る例が多いが、「単なる言いかえとして使用されているのではない」例も指摘する。代表例が『蜻蛉日記』にみえる「ひとつ車」と「同じ車」であり、「ひとつ車」は複数の人が一つの車と一緒に乗る相乗りの意で用いられることが多く、同時性を含まない場合が「同じ車」であるとした。

これらの結果をもとに、須磨巻において「ひとつ」が用いられた理由を考えてみたい。前節で確認したように、悲しいときと同じ涙がという意の表現としては賢木巻に「めぐらしくうれしきにも、涙落ち」が用いられていた。わざわざ「ひとつ涙」とするからには、「涙」とも「同じ涙」とも異なるニュアンスがあるはずである。歌の用例からは複数性との対照によって「ひとつ」が要請されることが多かった。須磨巻での複数性とは悲喜「こも」といった感情の多様さではなく、光源氏と宰相中将の二人が同時にということではなかったか。そう考えれば、源氏と宰相中将が単に「同じ涙」を流すというのでは表せない、二人が一体となって喜び合っている状況を「ひとつ涙」で表現していたことになる。そして、この用法は「複数人が一緒に同じ車に」の意で相乗りを意味する「ひとつ車」の使用法と齟齬しない。「同じ涙」は時間的に先後する場合にも用いられ

るため、同時性を強調できない。また「ともに」では都と須磨とに遠く離れていた二人がようやく出会い、時と場所を同じくして涙を流すという一体感が弱い。つまり、須磨巻では「同じ涙」や「ともに」では表現ができない、複数人がともに流す涙を表現するために「ひとつ涙」が選択されていたと考えられるのである。

## 七 『栄花物語』 『浜松中納言物語』 『苔の衣』 の「ひとつ涙」

仮名散文における「ひとつ涙」は『源氏物語』以後わずかながら見られる。

・故上の御事をかへすがへす聞えさせたまひつつ、誰もいみじう泣かせたまふ。よろづ一つ涙といふやうに見えさせたまふも、あはれに見えさせたまふ。

（『栄花物語』浦々の別・①二九四頁）

・中納言は吉野姫君と凡帳ばかりの隔てだになく、明け暮れかたはらにて経は読みつつも、(唐后の)おはせしありさま、のたまひしことなど、尽きせず語り出で給へば、ひとつ涙に浮かみ給ひて明かし暮らし、

（『浜松中納言物語』卷四・三三六頁）

・中納言おどろきて、(宮を)入れたてまつり給ふ。ことよろしきにこそありけれ、かしこまりもえ置きあへず、枕に火を近うて、宮も中納言もひとつ涙を流して、まもりあつかはせ給ふ。

（『浜松中納言物語』卷五・四三三頁）

・(宮に襲われ)女御はただ夢路におぼる心地して、たけきこと

とは泣き悲しみ給ふさま言はんかたなし。(中略)今ひとしほの近まざりに(宮)「またはいつかはかばかりの夢の中の対面も」と思ひ続くるままに、今一際思ひ添ひぬる心地して、一つ涙に溺れ給ふさま御身も浮きぬべし。

(『吾の衣』冬・二一八―二一九頁)

いずれも『源氏物語』の影響を深く受けている作品であるため、注釈も『源氏物語』からの引用を指摘することに重点がおかれがちだった。しかし、こうして列挙すれば明らかのように、すべての用例が複数の主体が一緒に泣くさまと解釈できる。

ところが、これまで『源氏物語』を経由して『後撰集』歌を想定する注がつけられていた。たとえば、『栄花物語』については、次のようにあった。

○(頭注)「うれしきも憂きも心は一つにてわかれぬものは涙なりけり」(後撰・雑)をふまえる。再会を喜んで涙を流し、母の薨去を悲しんでも涙をながすのである。

(訳)故母北の方(貴子)の御事を尽きることなくお申しあげになつては、誰もひどくお泣きになる。うれしいにつけ悲しいにつけ、何事につけても涙は同じといったふうにお見えなさるのも、感慨無量のご様子である。(新全集『栄花物語』頭注/訳)

しかし、これも「一つ涙」ではなく、「よろづ」の方にうれしいとき、かなしいとき、つらいときが含まれており、万事につけ「誰

も」が一緒に涙を流していると解釈すべきであろう。筑紫からはるばる帰京した伊周と中宮とが再会を果たし、一体となって泣くさまを強調しているのである。

『浜松中納言物語』巻四「ひとつ涙に浮かみ給ひて」は、吉野姫君と中納言が一緒に泣いてひとつの涙に浮かんでいる。『吾の衣』「ひとつ涙に溺れ給ふ」は、宮と女御が原因は異なるけれど、二人とも悲しみの涙を流し、その涙で溺れるとする。「ひとつ涙」が「涙に浮く」という比喩的表現と結びつき、より詩的語句へと変化していく過程がうかがえる。巻五の用例には以下のような注がついていた。

○……つまり、「一つ涙」は憂きことと嬉しきことが共存する状態をいうのである。ここでは中納言と式部卿の宮内人の憂きことと嬉しきことが相重なるということの意味する。涙を流す心の中味ではなく、別々の人が同様に涙を流すことを「一つ涙」といつている。……

(『浜松中納言物語全注釈』巻五・二二二―二二三頁)<sup>(注19)</sup>

引歌の指摘など必要なく、確認してきたように中納言と式部卿の宮が一緒になって涙を流すという指摘で十分なのだ。

## 八 結語

『源氏物語』を中心に、他の物語作品を含め散文では「ひとつ涙」を「複数の人物が一緒に流す涙」として解釈すべきであることを明

らかにした。須磨巻の解釈としては、涙をこぼすのは宰相中将と光源氏二人であり、「宰相中将が光源氏と」対面するやいなや、珍しくうれいものにつけても、ともに同じ涙がこぼれたのだった」の意となる。光源氏も泣いたのである。物語成立当初は当たり前に理解されていた語義がわからなくなり、注釈作業を通して悲喜こもこもの一つ涙という意味が付与されていたのである。

その「ひとつ涙」が歌に使われ始めたのは、中世歌人たちの『源氏物語』享受後であった。とはいえ、須磨巻を引き受けたものと即断できない。これら歌の「ひとつ涙」は多様な意を有し、内実はその都度文脈により確定していくしかないが、少なくとも『源氏物語』須磨巻を踏まえていたとまではいえない。歌ことばとして十分に成熟せず、歌人たちになじまなかったのであろう。

すなわち、古注釈が掲げた『後撰集』歌の受け止め方に慎重さを欠いた現代の注釈書が『源氏物語』須磨巻の「ひとつ涙」を誤読し、それを前提として『栄花物語』・『浜松中納言物語』を読む注釈書が現れた。そうして見いだされたのが、悲喜こもこもの涙という意味の「ひとつ涙」だった。

本稿で引用する『源氏物語』の注釈書およびその略称は次のとおりである。

- ・『提要』……稲賀敬二『源氏物語古注集成 今川範政源氏物語提要』（桜楓社、一九七八年）
- ・『孟津抄』……野村精一『源氏物語古注集成 孟津抄』（桜楓社、

一九八〇年）

- ・『覚勝院抄』……野村精一・上野英子『源氏物語問書 覚勝院抄』（汲古書院、一九九〇年）

- ・『源氏釈』……中野幸一『源氏物語古註釈叢刊 第一卷』（武蔵野書院、二〇〇九年）

- ・『岷江入楚』……中野幸一『源氏物語古註釈叢刊 第七卷』（武蔵野書院、一九八六年）

- ・『一滴集』……吉澤義則『未刊国文古註釈大系』（帝国教育出版、一九三六年）

- ・『湖月抄』……有川武彦『増註源氏物語湖月抄』（弘文堂、一九二七年）

- ・『新釈』……秋山虔・鈴木日出男『賀茂真淵全集』（続群書類従完成会、一九七九年）

- ・『新解』……金子元臣『定本源氏物語新解』（明治書院、一九二五年）

- ・『對校』……吉澤義則『對校源氏物語新釈』（国書刊行会、一九七一年）

- ・『全書』……池田龜鑑『日本古典全書 源氏物語』（朝日新聞社、一九四九年）

- ・『全釈』……松尾總『全釈源氏物語』（筑摩書房、一九六二年）
- ・『完譯』……五十嵐力『昭和完譯源氏物語』（東洋印刷、一九五九年）

- ・『大系』……山岸徳平『日本古典文学大系 源氏物語』（岩波書店、一九五九年）

- ・『評釈』……王上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店、一九六五年）
- ・『全集』……阿部秋生・秋山虔・今井源衛『日本古典文学全集 源氏物語』（小学館、一九七二年）
- ・『集成』……石田穰二・清水好子『新潮日本古典集成 源氏物語』（新潮社、一九七七年）
- ・『学術文庫』……今泉忠義『新装版源氏物語』（講談社、二〇〇一年）
- ・『完訳』……阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『完訳日本の古典 源氏物語』（小学館、一九八四年）
- ・『新大系』……柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎『新日本古典文学大系 源氏物語』（岩波書店、一九九四年）
- ・『新全集』……阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『新編日本古典文学全集 源氏物語』（小学館、一九九四～一九九八年）
- ・『鑑賞と基礎知識』……日向一雅『源氏物語の鑑賞と基礎知識 須磨』（至文堂、一九九八年）
- ・『注釈』……山崎良幸・和田明美・梅野きみ子『源氏物語注釈』（風間書房、二〇〇三年）
- ・『正訳』……中野幸一『正訳源氏物語 本文対照』（勉誠出版、二〇一六年）
- ・新版『岩波文庫』……柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎『源氏物語』（岩波書店、二〇一七年）

## 注

- (注1) 『源氏物語』『無名草子』『伊勢物語』『茨花物語』『浜松中納言物語』の引用は新編日本古典文学全集（小学館）に、『若の衣』の引用は中世王朝物語全集（笠間書院）に、和歌の引用は『新編国歌大観』（角川書店）に拠った。当該部分において河内本系は「めづらしうれしきに」とあり「も」がない。「も」があることで余計に「うきも」を想像させることが考えられるが、「も」のない河内本系本文の注釈書も引歌を想定する。後述するように、涙は悲しいときにでるのが前提となっており、「も」の有無は引歌想定に影響しなかったと思われる。
- (注2) 新全集『無名草子』、一九八頁。
- (注3) 「引歌」の内包する意味は多様であるが、ここでは宣長『片岡説（片岡利博 異文の愉悦 狭衣物語本文研究）』笠間書院、二〇一三年）の定義に従い用いる。
- (注4) 注に「後撰集」（中略）保坂「この歌によるのだと、今は、うれしいのに、悲しむ時と同じ涙。また、会ううれしさと、京ではない悲しさといっしょになった涙。の二解がある。この歌の言葉だけを用いたのなら、二人は同じように涙がこぼれた、となる。」とある。
- (注5) なお、辞書類において、「ひとつ涙」を項目として挙げるものは少なく、北山谿太『源氏物語辞典』（平凡社、一九五七

年)は「ひとつ」の項で須磨巻を例に「一つ涙(悲シキ時  
下同ジ涙ノ意)ぞこぼれける」とし、『日本国語大辞典』(小  
学館、第一版一九七五年、第二版二〇〇一年)は第一版・  
第二版ともに須磨巻と『苔の衣』を例に「同じ涙。他の人  
と同じ理由で流す涙。」とする。結局、この須磨巻をどのよ  
うに解釈するかによって「ひとつ涙」の意味が決定するこ  
とになる。

(注6) 『提要』は場面全体についての注なので今は措く。また、新  
全集『浜松中納言物語』頭注も「(ひそかに来訪した頭中将  
を)うち見るより」とある。

(注7) 『新釈』或説に宰相の源を見る事とせり、されと源も宰相  
も相見たるをかねたりとも見ゆ」、また『寛勝院抄』にも「源  
氏ト三位中将ト也」とある。

(注8) 『全釈』は「うち見るより」に敬語が無いことに着目し、見  
る対象を「住い」とするか、「うち見るより」が一つの慣用  
句となっていた可能性を考える。他に「うち見るより」の  
例はなく、対象が「住まい」であったとしても、主体が光  
源氏か宰相中将であれば敬語はつくはずであり、説明に無  
理がある。語り手が宰相中将により添っているため敬語が  
つかなかったと解するのが無難であろう。『新釈』の「或説」  
は、『岷江入楚』の「宰相の君の源氏をみたまつる心歎」  
を指すと思われる。

(注9) 正徹の『源氏物語』撰取については、安達敬子『源氏世界  
の文学』(清水堂出版、二〇〇五年)、阿尾あすか「正徹の

『源氏物語』撰取について」(国文学研究資料館平成二〇年  
度研究成果報告『物語の生成と受容』④)国文学研究資料館、  
二〇〇九年三月)、江草弥由起「正徹の物語歌撰取考」(『中  
世文学』五九号、二〇一四年六月)など。正徹は『滴集』  
(一八五頁)において、「うれしきに」に「ウレシキモウキ  
モ心ハヒトツニテワカレヌ物ハ涙ナリケリ」と注している。  
また、『草根集』には宰相中将の目からみた源氏の住まいの  
描写「竹編める垣」(須磨・②二二三頁)からとったと思わ  
れる。「此山の陰のともし火消ぬよもあらしの窓に竹あめる  
垣」という歌もあること、安達前掲書三二三頁に指摘があ  
る。

(注10) 『拾遺集』では橘忠幹が女性に送った歌とあり、相手の性別  
が変化している。『伊勢物語』の成立とも関わる問題だが、  
本来は女性への歌であることは疑えないだろう。

(注11) 佐伯真一「ひとつはちす」考(『青山語文』四二号、二〇  
一二年三月)は、『源氏物語』において「同じ台」「同じ蓮」  
という語で表されていた(縁者の同蓮)の発想が(同行の  
同蓮)の発想と交わり、鎌倉時代には歌語「ひとつはちす」  
として定着したことを指摘する。「ひとつ涙」はそこまで  
至らなかつたということになる。

(注12) 七節で扱う巻五・四二三頁の「ひとつ涙」の直後に言い換  
えとして「同じ涙」が使われている。

(注13) 伊井春樹『源氏物語引歌索引』(笠間書院、一九七七年)。  
鈴木日出男『源氏物語引歌総覧』(風間書房、二〇一三年)

は、葵巻を除いた藤裏葉巻と柏木巻を挙げる。

(注 14) 工藤重矩『和泉古典叢書3 後撰和歌集』(和泉書院、一九九二年)に指摘がある。

(注 15) 中野幸一『源氏物語古註釈叢刊 第八卷』(武蔵野書院、一九九七年)二二一頁。

(注 16) 『古語大辞典』(小学館、一九八三年)のように、「同じ心」は「同じような気持ち。同じ考え。類義語「ひとつ心」は心を合わせ協力するさまで、区別がある」とする説もある。木船重昭『後撰和歌集全釈』(笠間書院、一九八八年)に指摘がある。

(注 17) 『赤羽淑先生退職記念論文集』(赤羽淑先生退職記念の会、二〇〇五年)所収。ただし、「ひとつ涙」への言及はない。

(注 18) 中西健治『浜松中納言物語全注釈』(和泉書院、二〇〇五年)。(ほさか さとし・北海商科大学准教授)

(注 19)

中西健治『浜松中納言物語全注釈』(和泉書院、二〇〇五年)。

(ほさか さとし・北海商科大学准教授)